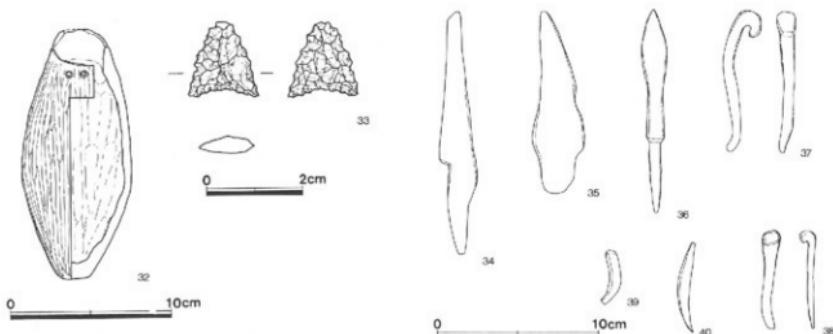


fig. 647 出土遺物実測図(1)



- | | | |
|--------------|------------------|--------------|
| 1 SP170出土土师器 | 9 SD01出土灰陶器 | 34 SB01出土刀子 |
| 2 SP90出土土师器 | 10~11 1号坑出土漆器 | 35 SP187出土刀子 |
| 3 SP169出土土师器 | 12~14 2号坑出土漆器 | 36 1号坑出土铁镰 |
| 4 SP344出土土师器 | 15~25 4号坑出土漆器 | 37 包含层出土铁钉 |
| 5 包含层出土漆器 | 26~31 SB2001出土漆器 | 38 包含层出土铁钉 |
| 6 包含层出土漆器 | 32 SD05出土铜型土器 | 39 SP127出土铁钉 |
| 7 SP14出土瓦器 | 33 包含层出土石镰 | 40 SD01出土铁钉 |
| 8 SP188出土漆器 | | |

fig. 648 出土遗物实测图(2)



fig. 649 出土遗物 (1号坑出土)

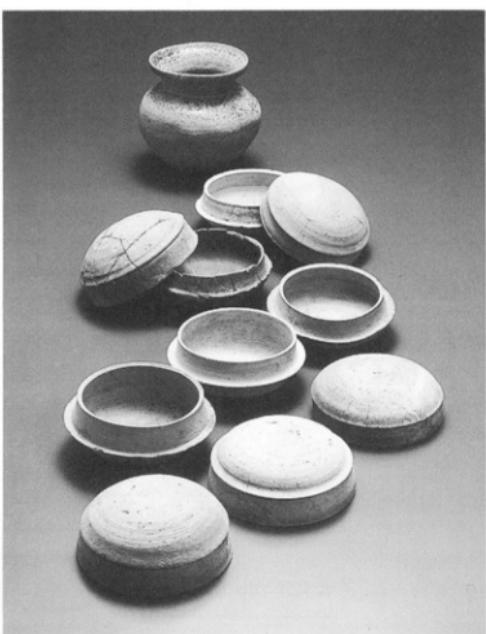


fig. 650 出土遗物

3. 本山遺跡 第27次調査

1. はじめに

本山遺跡は神戸市東灘区本山中町・本山南町一帯に所在する縄文時代～近世に至る集落遺跡で、六甲南麓の複数の河川により形成された複合扇状地上に立地している。過去の26次にわたる調査では明確な居住域は確認されていないものの、多量の土器や石器、木製品などが出土しており、大規模な集落が存在したものと推定されている。

また調査地の西隣で実施した第12次調査では、弥生時代中期の包含層上面より扁平紐式袈裟棒文銅鐸が出土している。

今回の調査は、平成4年度に行った調査（第14次調査）の終了後、設計変更に伴い、新たに調査が必要となった部分を対象として実施した。

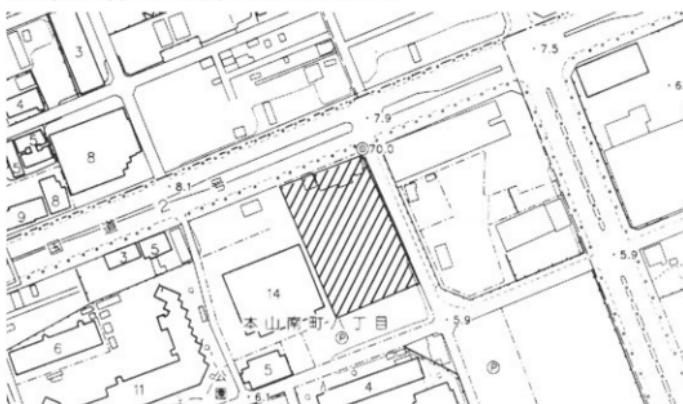


fig. 651
調査位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

今回の調査地は、現況で標高約6m付近に位置する。調査区の基本層序はコンクリート基礎をまじえる盛土層の下に1938年（昭和13年）の阪神大水害による洪水層、近世～近代の複数の耕作土、中世までの遺物を含む（灰）褐色系粘質土の中世耕土層があり、黒褐色粘質土・粘質細砂（弥生時代包含層）が堆積する。包含層の下層は、灰色あるいは黄褐色粗砂層である。弥生時代の包含層である黒褐色粘質土あるいは粘質細砂は、北側の調査区では40cmほどの厚みがあるが、南に下がるにつれ、堆積は薄くなり、検出レベルも低くなる。また弥生時代遺構面の下層は、縄文時代晚期の遺物を

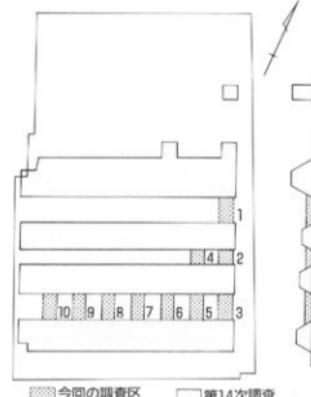


fig. 652 調査区設定図

含む粘土層、前期の遺物を含む粘土層と礫層が互層をなして堆積しており、土石流や洪水層の流入が繰り返しここったと推定される。さらに下層には縄文時代のベース面と考えられる暗青灰色粘質土、海成砂である灰白色砂層が堆積していることが先回の調査で確認されている。今回の調査では、工事影響深度の関係から、北側では灰色粗砂面まで、南側では弥生時代の包含層の上面検出まで行った。

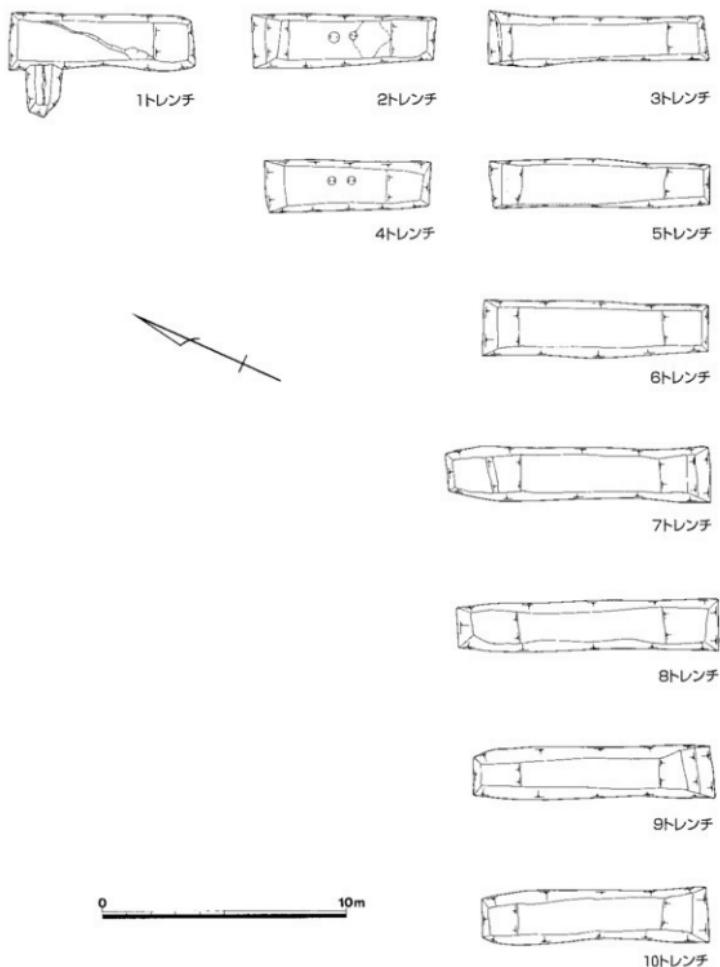


fig. 653 調査区平面図

1 レンチ

盛土直下の黒褐色粘質土に弥生時代前期～中期の土器片が多く含まれていたが、いずれも細片である。この包含層を除去後、西側へ下がる落ち込みが確認された。落ちの肩部では鍔状の木製品が出土しており、先回の調査時、Ⅲレンチで検出されたSD01に続くものと考えられる。また土層観察の結果、レンチ北方の調査区壁面で噴砂の痕跡を確認した。弥生時代の包含層である黒褐色粘質土の下層に堆積する黄色細砂～極細砂が液状化現象に伴い圧迫され、黒褐色粘質土層、さらに上層の中世の耕土層である茶褐色粘性砂質土層を突き破り上面に達していた。中世の耕土層上面まで達していたこと、また規模などから1596年の慶長の大地震によるものと推定される。また、この噴砂を境に、北と南の層序には約10cm程の層の食い違いが認められる。明確ではないが、旧河道の方向などに沿って地面がスライドした可能性が考えられる。なお今回検出した噴砂部分の壁面土層の剥ぎ取り（土層転写）作業を行い、保存している。

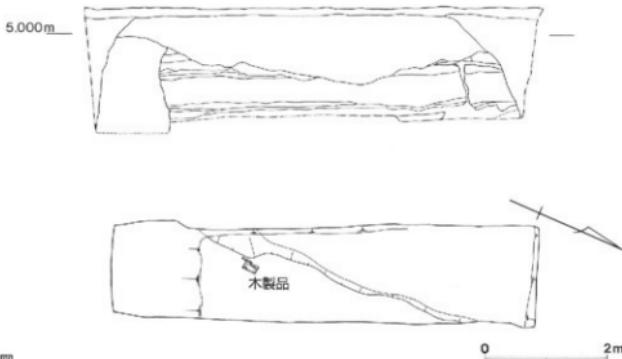


fig. 654
1 レンチ平面図・断面図



fig. 655 1 レンチ全景

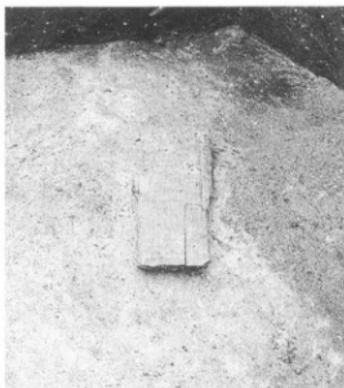


fig. 656 木製品出土状況

その他の
トレンチ 各トレンチの弥生時代の包含層は南に下がるにつれ順次薄くなり、6～10トレンチでは厚さが概ね5～10cm程度で、遺物の出土量も減少する。逆に上層の（灰）褐色系の粘質土が厚く堆積しており、中世以降、活発な水田耕作が行われたことが想像できる。これらの面で確認された鰐溝と考えられる小溝の中にも比較的多くの弥生土器片が見られる。2～5トレンチにかけては湿地状の堆積が顕著で、包含層としたものの大半は流れ込みによるものと考えられる。

9・10トレンチでは、安定した地盤ではないが、遺構面に相当する灰色粗砂層が比較的浅い位置で検出されており、第12・14次調査の結果とも合わせると、北西から西にかけての安定した遺構面がこの辺りまでのびていることが想定できる。しかしこの位置では遺構は確認できなかった。

3. まとめ 今回設定した調査区はいずれも先の調査区の範囲内におさまり、結果的に先の成果を越えるようなものではなかった。遺物も北側の包含層の残りの良い部分では多く出土したものの、いずれも細片の状態であった。調査区の制限から流路の肩部などの検出も困難であった。

本山遺跡では、近年、国道2号線付近を中心に弥生時代の竪穴式住居址・柱穴・土坑・溝などの生活遺構が検出されており、集落の一端を知る手掛かりが増えつつあるが、2号線の北側の、より高位の段丘面では後世の削平のためか明確な遺構に乏しく、また南側は洪水層あるいは土石流の堆積による不安定な土壤のため、自然流路などの痕跡の他、大半は湿地状地形を呈する。付近は小河川により形成された舌状にのびる段丘や小浸谷などが複雑に入り込んだ地形であったと推定されることから、本山遺跡全体を把握するにはなお今後の調査の成果が必要である。



fig. 657 噴砂層

4. 上小名田遺跡 第20次調査

1. はじめに

上小名田遺跡は三田盆地の南半で、武庫川の支流である八多川流域に位置する。八多川により形成された沖積低地～丘陵端部に広がる遺跡である。

この遺跡では6世紀の竪穴住居が見つかり古墳時代後期にも集落は存在するが、開発は平安時代から本格化する。10世紀に集落が造営され、11～12世紀の集落は拡散する。また9世紀の遺物も出土しており、集落の成立が遅る可能性もある。

これまでの調査では、10世紀後半～11世紀前半の配置に規則性を持つ建物群を確認している。周囲から石帶や綠釉陶器の香炉片も出土し、整田經營等で勃興した在地有力者（富裕農民層）の屋敷地と推定できる。

今回の調査は個人住宅の建設に伴い、約110m²の調査を実施した。調査地は遺跡のほぼ中央付近に位置し、近世～近代の旧有馬街道に沿った南東側に位置している。



2. 調査の概要

基本層序は耕土、床土、淡灰色砂質土、淡黃灰色砂質土（第1遺構面）、淡灰色～灰色砂質土、淡黃褐色砂質土（第2遺構面）となる。

遺構面は2面を確認している。概要是下記の通りである。

第1遺構面 遺物は鎌倉時代頃の須恵器片がわずかに出土しただけである。柱穴と耕作痕を確認している。

柱 穴 柱穴が散在している状況を検出した。ただし、建物や柵列としての並びは確認していない。

耕作痕101 北から東へ約20°の方向へ延びる耕作痕を、多く確認している。

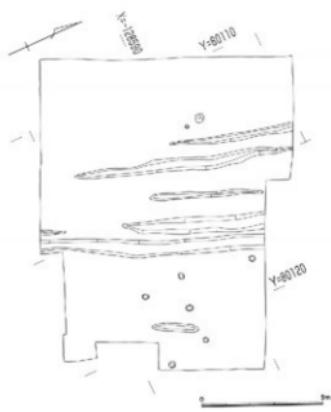


fig. 659 第1遺構面平面図

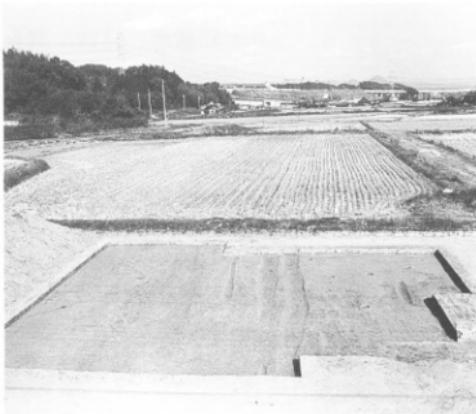


fig. 660 第1遺構面全景

第2遺構面 平安時代末～鎌倉時代の遺構面である。掘立柱建物、水溜め遺構、底部の焦土化した土坑等を確認した。

S B201 北から東へ約25°の方向に並ぶ柱穴列を検出している。耕作痕201とも方位を揃えている。建物の本体は調査区外の北西側に続くと思われる。柱穴は直径約30cmで、拳大の礫で根固めをするものも多い。柱間は約2.3mで、東西3間以上の掘立柱建物であろう。

S B202 S B201の柱穴に沿った西側に柱穴列を確認している。すべてS B201の柱穴を削平して掘削しており、立替えに伴う掘立柱建物である。柱穴は直径約25cmで、建物方位と柱間はS B201と同じであろう。

S B203 東西3間×南北4間以上の掘立柱建物である。建物方位は北から西へ約15°振っている。柱穴は約35cmを測り、柱間は東西約2.4m～2.8m、南北約2.0mである。柱根の残存する柱穴も確認している。

周囲の遺構との関係は水溜め遺構の埋没後に建てられ、この建物の廃絶後にS K203が掘削されている。

柵列201 調査区の東半で検出した、ほぼ東西方向に延びる杭列である。杭間は約80cmを測る。

水溜め遺構 楕円形に近い隅丸方形で、東西約1.3m×南北約1.6m以上を測る。深さは約60cmである。北側に集排水用の溝が取りつく他、西側には小木をくり抜いた舗を設置した小溝も認められる。

水溜めとして機能していた時期は平安時代末～鎌倉時代前半頃であるようだ。上層から多量の礫が出土しているが、廃棄後の埋め戻しに伴い地盤を安定させる目的で投棄したものであろう。この隙間から漆塗り椀も出土している。

S D201 水溜め遺構に付属する集排水用の溝である。水溜め遺構の北面に取り付き、東側に延びている。幅約0.7m～1.0mで、深さ約15cm～20cmを測る。

S D202 水溜め遺構に付属する小溝である。水溜め遺構の西面に取り付き、西側に延びている。

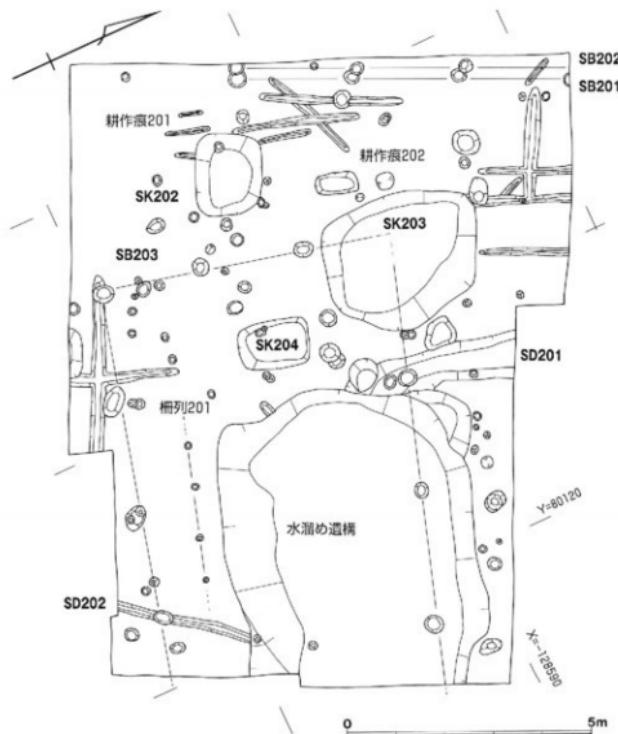


fig. 661
第2遺構面平面図



fig. 662
第2遺構面全景

幅約20cm、深さ約10cmを測り、小木をくり抜いた撻を設置している。

S K 202 開丸方形の土坑であり、東西約1.3m×南北約1.6m、深さ約25cmを測る。土坑の堆積状況は細砂～シルトの細かな水平堆積が認められ、上面近くまで自然堆積した可能性が高い。

S K 203 楕円形に近い開丸方形の土坑であり、底部の焦土化が認められる。東西約2.0m×南北約2.8m、深さ約20cmを測る。底部直上には多量の炭化物が堆積し、遺物は中世の須恵器が細片で、僅かに出土した。他の遺構との関係では、S B 203を削平している。

S K 204 開丸方形の土坑であり、東西約1.3m×南北約1.0m、深さ約15cmを測る。遺物は出土していない。

耕作痕201 北～西へ約20°とそれに直交する方向に延びている。第1遺構面で検出した耕作痕とも、同じ地割りにもとづいている。土坑や柱穴を削平している。

耕作痕202 北から東へ約25°とそれに直交する方向に延びている。耕作痕201に削平され、より時期の遅る遺構である。遺物は出土せず、耕作痕の時期や他の遺構との新旧関係は不明である。

3. まとめ 今回の調査は、面積、深さ等、非常に限られた調査であったが平安時代末～鎌倉時代にかけての遺構面を確認することができた。中世における集落の広がりを考えるうえで貴重な資料を得ることができた。



fig. 663 水溜め遺構内漆塗り椀出土状況

5. 淡河木津遺跡 第1次調査

1. はじめに

淡河木津遺跡は神戸市北区淡河町木津に所在する。北区八多町屏風を源とし、三木市に入り志染川と名称を変える、淡河川の中流域の左岸、標高約150mの河岸段丘上に位置している。周辺には、萩原遺跡、淡河城、萩原城等、中世期の遺跡が多く知られている。

今回の調査は木津地区のは場整備事業に先立って行ったもので、試掘調査の結果から、工事影響部分の約5094m²について発掘調査が必要となった。発掘調査は1~15区に分割して実施した。



fig. 664
調査地位置図
1 : 4,000

2. 調査の概要

1~3区は耕土直下に淡灰色シルト質極細砂の遺物包含層がありその下は地山層となつ

1~3区 ている。

集落跡などの明確な遺構は検出されず、耕作痕、耕作段が数カ所で検出された。

4・5区

4区は段丘端部の崖に面した調査区であり、現代耕作土直下が、無遺物の洪水砂礫となつておらず、遺構は確認されなかった。また、5区においても4区と同様に、現代耕作土直下が洪水砂礫層であり、耕作土中に中近世の遺物が混っていた他は、遺構、遺物共に確認されなかった。

- 6 区 6区は南北が12m、東西が約18mの調査区である。現代の耕作土を除去した後、黄褐色疊交じり粘土（地山）上面で遺構確認調査を行った結果、掘立柱建物1棟、用途不明土坑2基、落ち込み、ピット群が検出された。
- S B01 東西3間（8.0m）×南北2間（5.4m）以上の総柱の掘立柱建物である。基盤層が削平を受けているためか、柱穴の残りは悪く、検出できなかった柱穴もあった。柱穴内出土の土器より、13～14世紀に位置づけられる。
- 7 区 7区は幅3mで長さが約55mの、南北に長い調査区である。現代の耕作土を除去した後黄褐色疊混じり粘土（地山）及び明灰黄色シルト（地山）の上面で遺構確認調査を行った結果、掘立柱建物1棟、ピット群の他、江戸時代の溜め井戸1基を検出した。
- S B02 東西1間（1.7m）以上×南北2間（4.1m）以上の掘立柱建物である。柱穴内出土の土器より、13～14世紀に位置づけられる。
- 8 区 8区は幅3m、長さ約50mの調査区である。現代耕作土を除去後、明灰黄色シルト（地山）上面で遺構確認調査を行った。鎌倉時代の溝が1条検出されている。

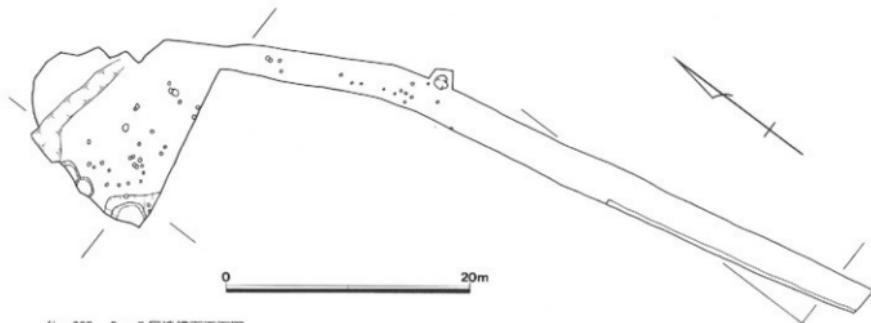


fig. 665 6・7区遺構面平面図



fig. 666 6区遺構面全景



fig. 667 7区遺構面全景



fig. 668 9区遺構面平面図

fig. 669
9区南部遺構面全景

9 区

9区は遺跡の位置する河岸段丘のほぼ西端付近にあたり、北は段丘崖に面している。現代耕作土及び盛土を除去した後、中世の包含層である褐灰色シルト質細砂上面及び黄褐色礫混じり粘土（地山）、黄褐色粘土（地山）上面で遺構確認調査を行った。結果、褐灰色シルト質細砂上面では遺構は確認できず、その下層の地山面で遺構を検出した。

S B03 東西3間(7.5m)×南北3間(7.3m)の縦柱の掘立柱建物である。柱間は東西が2.3~2.6mを測る。一方南北は、3間の内、中央が3.0~3.2m、両側が2.0~2.3mと中央の柱間がかなり広くなっている。柱穴の埋土は殆どが1層で、地山上に堆積していた褐灰色シルトによって埋没していた。柱穴内の出土遺物より、13~14世紀に位置づけられる。

S B04 東西2間(4.2~4.3m)×南北3間(5.8~6.1m)の縦柱の掘立柱建物である。柱間は東西が1.9~2.1、南北が2.0~2.1mを測る。柱穴内の出土遺物より、13~14世紀に位置づけられるが、S B03との前後関係は不明である。

S B05 調査区北端の、段丘崖に面した建物である。崖面に平行して3列の柱列が検出されているが、梁方向の柱がずれており、何らかの理由で平行にずれたか、もしくは1列づつの柱列が独立して機能していた可能性が考えられる。柱間はそれぞれ北が6間、中間が5間、南が4間分検出している。

園池遺構 木津遺跡の位置する段丘は、巨視的に見ると南が高く、北へ向かって下がっているが、

園池周辺においては東が高く、西側の小規模な谷へと緩やかに下がっている。

園池は、地山（黄褐色疊混じり粘土）を掘り込んだ後に護岸石組みを施しており、池の底面に露出している礫は、地山中に含まれているものである。護岸石組みの基底石は、掘形を持たず、地山面に直接据えられている。これは池自体の規模が小さいため、それ程、大がかりな施設を要しなかったためと考えられる。また、園池の周辺には拳大、もしくはそれよりやや大きい礫が入っているピットが点在しているが、これは景石の掘形である事や、礫が、景石を支えるかませ石であること等が推測される。以下に園池遺構の詳細を記す。

S X 02 長径約 6.0m、短径約 4.5m、深さ 50cmの堀り込みであり、梢円に近い長方形を呈し、

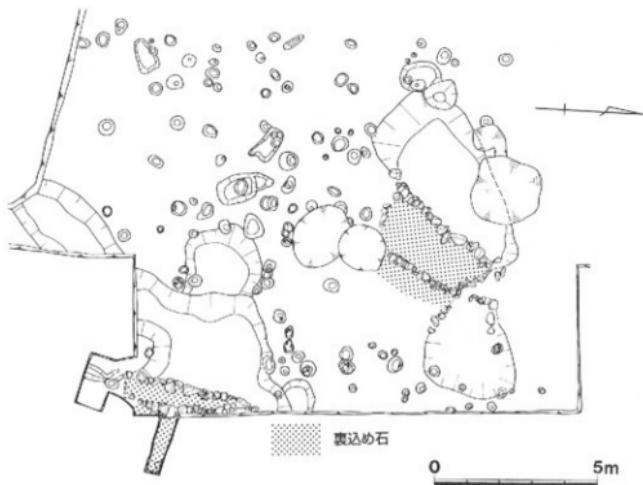


fig. 670
園池状遺構平面図



fig. 671
9区園池状遺構

長径方向がほぼ東西に向いている。対角線上及び南東側に2列の護岸石組みを持つ。石組みはそれぞれ直径約20~70cmの川原石を積んで形成されているが、検出されたのは基底の1段乃至2段のみであり、更に上は残存していなかった。石組み1の北西側には同程度の石が落ち込んでおり、石組みの石が何らかの理由によって転落したものと考えられる。また、石組みはそれぞれ北西面に石の平坦面を向けて積まれている事や、南東側を拳大の礫によって裏込めされている事等から、堀り込みの底面が露出している北西側を意識して形成されていると考えられる。出土遺物より、14世紀初頭に埋没したと考えられる。

S X03 東西8.0m以上、南北約4.0m、深さ40cmの堀り込みである。ほぼ南北方向を向いた2列の護岸石組みを持つ。どちらの石組みもS X02の石組み1、2と同規模の川原石を1段乃至2段積んで形成している。こちらも上段は何らかの理由によって破壊されている様である。S X02と同様の理由より、西面を意識して形成されている。また西側には直径約2.5m、深さ約10cmの浅い部分があり、洲浜的なものであった可能性がある。またS X03の南にはS D08が取り付くが、これは検出レベルより、S X03に水を流し込む導水路の可能性が考えられる。出土遺物より、14世紀初頭に埋没したと考えられる。

S X05 直径約3.0m、深さ10cmの堀り込みである。非常に残りが悪く、浅い皿型を呈する。石組みは西側に若干残存していた。S X02よりもやや高い位置にあるため、池水が存在していたと考えると、S X05からS X02へ導水していた可能性が考えられる。ただし、洪水及び後世の削平のため、S X05への導水方法は不明である。出土遺物より、14世紀初頭に埋没したと考えられる。

S D03 幅約1.5m、深さ約30cmの溝であり、S X03の南西角に取り付き、北東-南西を向いている。出土遺物から、14世紀初頭に埋没したと考えられる。

S T01 調査区南西隅で検出された土坑墓で、長径155cm、短径70cm、深さ20cmを測る、梢円に近い長方形を呈する。長軸方向は東西で、残存していた脛骨もしくは大腿骨の位置から、頭位は東向きであったと考えられる。供献遺物は、龍泉窯系青磁碗、鉄刀、鉄製の火打金がある。青磁碗は口縁部を北に向けて横転しており原位置から移動しているが、頭付近に供献されていたものと思われる。鉄刀及び火打金は、墓坑のほぼ中央、南側に供献されていたが、坑底より約7cm程浮いた状態で出土した。出土した青磁碗より、13世紀前半に位置づけられる。

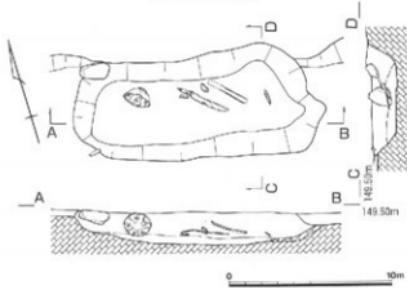


fig. 672 S T01平面図・断面図



fig. 673 S T01

10 区 10区は幅3m、長さ約60mの北調査区と、約170m²の南調査区に分かれる。北調査区は、現代耕作土直下が地山（黄褐色礫混じり粘土）であり、中世の遺構はピットが1基検出されたのみである。南調査区は、現代耕作土を除去すると鎌倉時代の遺物包含層（暗褐色礫混じり細砂）があり、この上面で江戸時代の遺構面が存在した。更に暗褐色礫混じり細砂を除去した後、地山である黄褐色礫混じり粘土上面で、鎌倉時代の遺構面を検出した。

10 区 - 南 出土遺物の年代より、江戸時代に位置づけられる。検出遺構は、鍛冶炉1基、用途不明土坑1基、ピット3基、溝3条である。

SK07 直径約95cm、深さ約23cmのほぼ円形を呈する土坑である。坑底には直径10cm～40cmの平らな礫が据えられており、北側の壁にも礫が貼られている。その上には5層の粘土が貼られ、中を皿状に成形している。更にその上にも粘土が貼られているが（オリーブ灰色粘土）、表面が高熱によってガラス質に溶解している。ふいごの取り付け痕や炭の残存は見られなかったが、鍛冶炉であると考えられる。

第2遺構面 出土土器の年代により、13～14世紀に位置づけられる。検出遺構はピット群、落ち込み3、段等である。段は5～20cmあり、耕作、もしくは宅地造成のための平坦地を形成する目的によるものと考えられる。

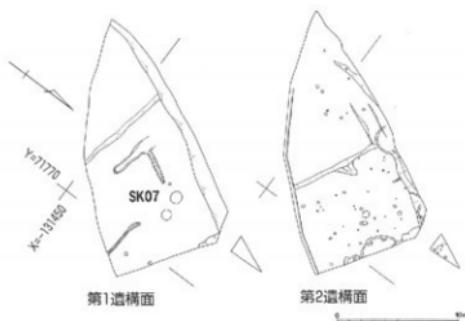


fig. 674 10-南区遺構平面図



fig. 675 10-南区全景

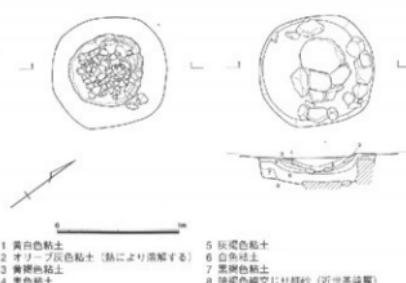


fig. 676 SK07平面図・断面図

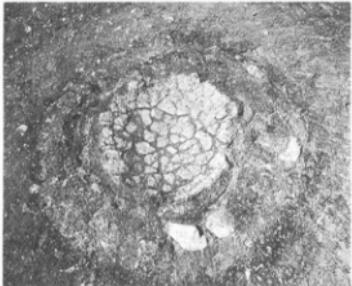


fig. 677 10-南区SK07



fig. 678 11区遺構面全景



fig. 679 11区遺構面平面図

11 区 西辺 23m、東辺 16m、東西 20m ほどの矩形の調査区であり、東から西へむかって緩く傾斜している。

基本層序は、東部においては、耕土直下、遺構面である黄灰色粘土となり、中央部から西部にかけては、包含層である灰黄色土、暗灰色土を挟んで遺構面である黄灰色粘土、黄茶色土となる。

建物 2 棟をはじめ、土坑 3 基、溝 3 条と纏まらないビット十数基を検出した。

S B01 調査区の中央部において検出された 2 × 3 間以上の掘立柱建物である。柱間は、南北 1.65、東西 1.5m である。西側の削平により確認できない柱穴もあった。

S B02 調査区の西端において検出された掘立柱建物である。2 間分の柱穴 1 列を確認した。柱壠方は、直徑 50~70cm とやや大きい。さらに西側へひろがるると考えられたため一部拡張したが、田圃の削平により確認されなかった。

S D01 調査区の北辺に沿って走る東西方向の溝である。現代の水路によって削平されており、底部が部分的に検出された。

S D02 S D01 の南側に接して流れる幅 30~90cm、深さ 20cm ほどの溝である。一部 S D01 に切られる部分がみられる。

12 区 幅 3.0m、延長 45m ほどの南北に長い調査区である。

基本層序は、耕土、床土以下、包含層である灰黄色土を挟んで地山層である黄灰色粘土に至る。

調査区の南部において、近世以降と思われる石組みの水路がみられた。この他の遺構は、確認されなかった。

13 区 7 区の東側に位置する南辺 28m、東辺 20m ほどの三角形の調査区である。

基本層序は、耕土、床土以下、包含層である淡灰黄色土を挟んで、遺構面である黄灰色土疊まじり、になる。

ただ、調査区の西半分と北側部分においては、近世と思われる整地のため、20~30cm ほ

ど掘り下げられた上に多量の礫が敷き詰められていた。遺構としては、建物1棟、近世のものも含めて井戸5基、土坑5基、ピット等を検出した。

S B01 調査区の南東隅において検出された 2×2 間以上の掘立柱建物である。東側の未調査地にひろがると思われる。

S E01・ 調査区の東部において直径2m前後、深さ1m弱の井戸状の遺構を3基検出した。いずれもラッパ状に上方に開く形状である。埋土の中層には、拳大の礫が数十cmにわたって、詰められている。

S E04 直径130cm、深さ80cmほどの円形の遺構で井戸と思われる。井戸枠などの施設は認められなかった。

S E05 直径130cmほどの円形の遺構である。南側半分を検出した。S E02によって北側の一部を切られる。



fig. 680
12区遺構面全景

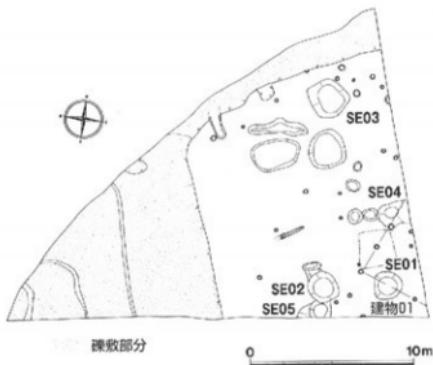


fig. 681 12区遺構面平面図



fig. 682 12区 S E01



fig. 683
13・14区遠景

14 区 幅3m、延長70mの南北に長い調査区である。南から北にかけて傾斜している。

基本層序は、北部では、耕土、床土以下包含層である灰褐色粘質土を挟んで遺構面である黄灰～灰色粘土に至る。中央部においては、耕土直下で遺構面である淡灰黄色粘土となり、北部においては、灰茶色土の包含層を挟んで淡黄褐色粘土の遺構面となる。

調査区南～中央部にかけて、耕作痕と考えられる溝、ピット数基が確認された。

15 区 幅3m、延長80mで、淡河川の段丘崖に沿って設けられた調査区である。

層序は一定せず、耕土直下で地山層となるところ、幾度かにわたる田圃の造成による整地層がみられるところや谷筋への深い流土が堆積し地山の確認されなかつた部分などある。

遺構としては、調査区北部において $40 \times 60\text{cm}$ 、深さ10cmほどの焼土坑1基が検出された。

遺物 今回の調査では、繩紋時代、鎌倉時代、江戸時代の遺物が28ℓ入りのコンテナで約20箱出土した。繩紋時代の遺物は石鏃、鎌倉時代は、須恵器、土師器、青磁、白磁等の食器類や、鉄刀、火打金等の鉄製品が出土した。また、江戸時代の遺物でも陶磁器類が出土している。これらの中でも中心となるのは鎌倉時代(13～14世紀)の遺物であった。

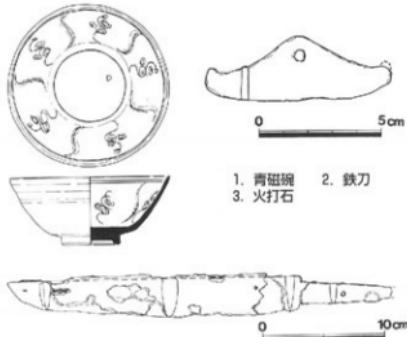


fig. 684 出土遺物実測図

3. ま と め 今回の調査では、鎌倉時代に属する遺構が多く検出され、今まで知られていなかった集落の様相がある程度確認できた。これは今後、木津遺跡の拡がりや性格を検討する上で重要な成果である。以下に調査の成果について記す。

- (1) 鎌倉時代の掘立柱建物が7棟検出され、木津地区に同時代の集落の存在する事が確認できた。これは文書にも記されている、淡河荘を検討する上でも重要な成果である。
- (2) 9区において検出された園池遺構は、当時の淡河荘の領民の、庭園に対する意識を形として捉えることができ、重要な成果であった。
園池の埋土からは、水の溜まっていた状況が見出せなかった。これは、元来池水を溜めない池であったのか、或いは池の底を掃除していたために水を落としていた事等が考えられるが、正確な事は不明である。また、景石及び護岸石組みに囲まれた部分には築山、もしくは前載があった可能性が考えられる。今回の調査では、出土遺物の年代より、園池と掘立柱建物が併存していたと考えられる。位置的には、建物の北側に隣接して園池が存在しているため、奥の座敷から園池を眺めていたと考えられ、この園池が奥庭であったという事が推察される。
- (3) 9区で検出された土坑墓からは、前述の様に、脛骨、もしくは大腿骨と考えられる骨が出土し、また中国製の青磁碗、小刀、火打金等が出土した。骨の出土状況より、頭位が東向きであった事がわかったが、仏教思想の北枕には反しており、被葬者、もしくは埋葬を行った集團は、北枕には拘りを感じていなかった様である。

- 火打金には実用のものと、祭事のみに使用するものの2種類が知られているが、今回出土した火打金は、使用痕の観察から、実用のものであり、携帯用に持ち歩いていたものと考えられる。また、火打金が墓から出土するのは今例だけであり、貴重な成果である。
- (4) 10区一南、第1遺構面で検出された鍛冶炉は、木津地区がかつて、神戸～吉川及び三木～三田それぞれの街道の交差する宿場であったという口承を裏付ける要素の1つと考えられる。また、織豊期には秀吉によって三木城攻めが行われたが、それに同行した鍛冶職人の存在もあり、今後も周辺において、同様の鍛冶関連遺構が検出される可能性が高い。



fig. 685
淡河木津遺跡遠景

6. 勝雄遺跡 第2次調査

1. はじめに

北区淡河町勝雄地区は、三田と三木を結ぶ街道筋に位置する。当地区においては近年圃場整備事業に伴い試掘調査を実施したところ中世の遺構や遺物包含層が確認され、遺跡の存在が明らかとなった。

試掘調査の結果を受けて昨年度に実施した1次調査では、中世の土坑や柱穴などを検出したほか、奈良時代末～平安時代初めの上器も検出され、当該地区の開発が当該期まで逆上る可能性が考えられるようになるなどの成果を得ている。



fig. 686
調査地位置図
1 : 4,000

2. 調査の概要

今回実施した2次調査も同じく圃場整備事業に伴うもので、昨年度実施した3トレンチの西側の水路部分（4トレンチと呼称）、その南西側に位置する水路部分（5トレンチと呼称）について調査をおこなった。

4トレンチ

幅3m、長さ約111mの調査区である。現況の田圃の区画毎に小調査区名を付し、東側よりA～J区と呼称する。

A～C区、E・F区では2面の遺構面を確認し、他の調査区では遺構面を1面確認した。

2面の遺構面を確認したA～C区、E・F区の第1遺構面で確認したのは、中世のスキ溝痕であり、第2遺構面が他の調査区の第1遺構面に対応する。

この全体を通して確認した遺構面では、溝2条、不定形及び円形の土坑・落ち込み多数、ピット多数などを検出した。包含層及び遺構内からの出土遺物は大半が中世の須恵器・土師器であり、1次調査で比較的多く出土した奈良時代末～平安時代初めの遺物は極少量であった。以下、主な遺構について述べる。

A 区 幅 70cm、検出した長さ 4 m、最深部の深さ 7 cmを測る。調査区内を北東～南西方向に走り、南西側は調査区外に延びる。遺物は極少量しか出土していないが、磨耗した石器や奈良時代末頃の須恵器などが出土している。

I 区 幅 30～50cm、深さ 8～17cmを測り、調査区内を北東～南西方向に走る。北東・南西の両側とも調査区外に延びるが、北東側が浅く、南西側が深い。中世の須恵器・土師器が比較的多く出土した。

ピット I 区で検出したピットは何れも径 20cm前後のもので、S P02以外のピットは全て柱を抜き取った跡に礎を投げ込んでいた。S P02は径 13cm、高さ 39cmの柱材が残存していた。柱は、面取り等の加工が施されているが、一部表皮が残っている。また、S P04では、柱材は抜き取られているが、礎盤の一部と考えられる木が遺存していた。遺物は各ピットとも極少量しか出土していないため詳細な時期については不明であるが、中世のものと考えられる。これらのピットはその状況から考えて掘立柱建物の柱穴と考えられるが、調査区内でそのまとまりを捉えることは出来なかった。

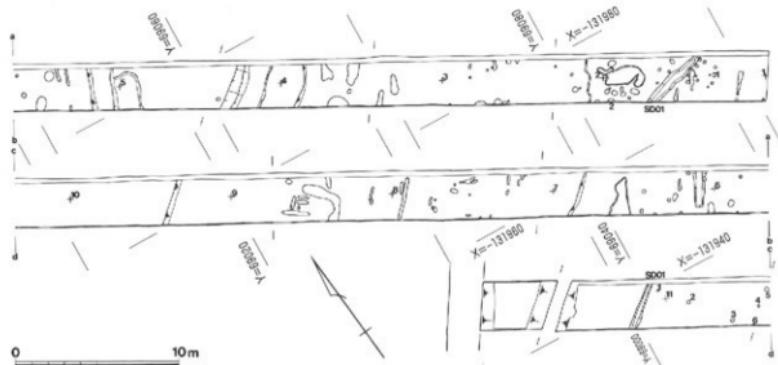


fig. 687 4 トレンチ平面図



fig. 688 4 トレンチ 1 区全景



fig. 689 S P02

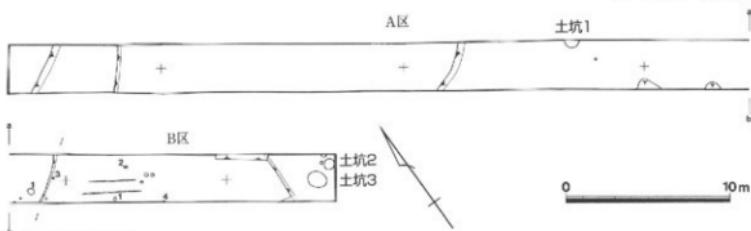


fig. 690 5トレンチ平面図

5トレンチ

幅3m、長さ約66mの調査区であるが、西側の約50m部分をA区、東側の約16m部分をB区とする。

A区

床土や旧耕土の下層に灰色のシルトあるいは粘土層が堆積しており、中世の須恵器・土師器が出土している。なお、一部後世の削平・搅乱によりこの灰色シルト層が存在しない部分もある。この灰色シルト層の下層で確認した（淡）黄灰色シルト層上面が遺構面であるが遺構が検出されたのは、東半部分のみである。遺物の出土が比較的多かったのもこの東半部である。検出した遺構は、土坑1基、ピット3基である。大半は中世の遺構と考えられるが、土坑とその西側のピットは灰色シルト層上面より掘り込まれており、他の遺構より新しい時期に属するものと考えられる。

ピット

ピットは径10cm前後のもの3基と44×39cmで深さ11cmのもの（S P01）1基である。

S P01の埋土は2層に分かれており、底面に有機質土層が堆積し、上層に（暗）緑灰色シルト層が堆積していた。中世の須恵器・土師器が出土している。

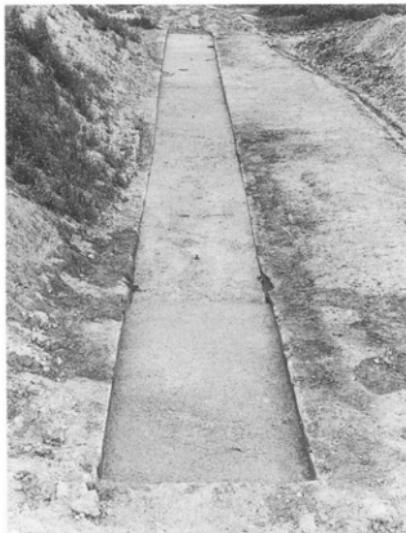


fig. 691 5トレンチA区全景

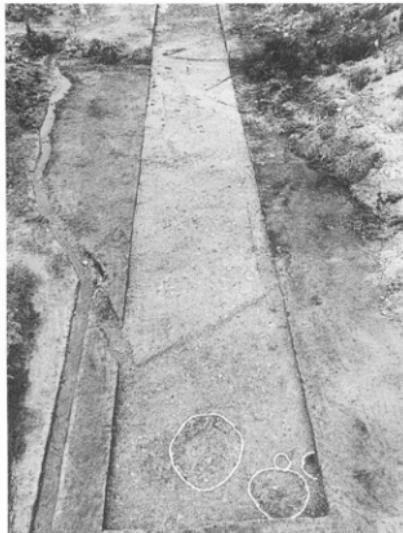


fig. 692 5トレンチB区全景

B 区 後世の削平・搅乱を大きく受けており、床土の直下で淡黄灰色シルト層及び地山面である淡灰色砂礫層の上面を検出した。遺構は西半部と東端部で検出されたが、埋土の状況から判断すると東端部で確認した遺構は西半部で確認した遺構より新しい時期のものと考えられる。検出した遺構は、土坑2基、ピット10基である。

土坑1 1.28×0.98m、深さ10cmを測る。遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。

土坑2 0.76×0.73m、深さ16cmを測る。土師器の小片が出土している。

ピット ピットは径15~34cm、深さ5~25cmのものである。調査区内で掘立柱建物としてのまつまりはみられない。SP01(30×27cm、深さ10cm)より柱材あるいは礎盤の一部と考えられる木が出土しているが、柱穴の底部分が残存しているのみであり、詳細は不明である。

3. まとめ 今回の調査では、特に4トレンチの灰色系のシルト層から比較的多くの遺物が出土したが、建物跡などの明確な遺構は検出されなかった。この状況は1次調査の3トレンチなどの状況と一致する。このことは、湿地状に堆積した灰色系のシルト層に土器は比較的多く含まれるもの、標高の低い地区については居住域としての利用がなされなかつことを示しているものと考えられる。ただし、4トレンチでも標高が高いところに位置するI区では掘立柱建物の一部と考えられる柱穴を検出し、柱材が比較的良好な状態で遺存している柱穴もある。このことは、標高が高い地区では居住域などに積極的に利用されていたことを示しているものと言えよう。今後調査の進展に伴い、遺跡内の各地区の土地利用の状況などが次第に明らかになるものと考えられる。



fig. 693 勝雄遺跡遠景

7. 勝雄遺跡 第3次調査

1. はじめに

勝雄遺跡は、加古川の支流淡河川中流域右岸の河岸段丘上にひろがる集落遺跡である。勝雄遺跡は平成7年度から平成8年度にかけて土地改良事業に伴う試掘調査において確認され、平成8年秋にからの調査において、鎌倉時代の柱穴や奈良時代の土器などが検出されている。



2. 調査の概要

今回の発掘調査は、第3次調査にあたり、淡河八幡宮境内の北に接する排水路部分（第I調査区と第II調査区の未調査部分）である。

第I調査区

第I調査区内を、旧水田区画に沿ってさらにI-A～I-Q区までの地区割を行って調査実施した。



fig. 695
調査区遠景



fig. 696 I - D 区全景



fig. 697 I - D 区平面図

I - A 調査区南東端の淡河川の河岸段丘端にあたり、調査区端からは、淡河川を望むことができる。A区は耕作土直下に黄褐色粘質土（砂礫含み）があり、これから掘り込まれて調査区西辺沿いに水溜め状の落ち込みと、ピット 6 基を検出した。

I - B A区の北隣、一段高い水田面の調査区である。耕作土・床土直下が褐色砂礫面の遺構面でピット 8 基、不定形の落ち込み 2ヶ所を検出した。

I - C～E B区より北側高位にあたるC～E区は比較的平坦面が続き、褐色砂礫を被覆する淡黄灰色粘性砂質土上面で遺構を検出した。検出遺構は竪穴住居 8 棟、掘立柱建物 6 棟、木棺墓 1 基、土坑 1 基、不明遺構 3ヶ所を検出した。

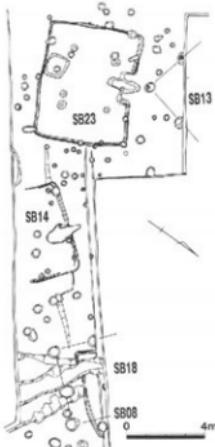


fig. 698 I - E 区平面図

fig. 699 I - E 区全景

I - F ~ L 遺構面は総て地山の上面で、F・G区とH区で多くの遺構を検出した。

検出した遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物6棟、溝11条、土坑9基、落込4ヶ所、ピット約80基である。削平された遺構の存在を想定しても、遺構はG区南端の大溝SD07以南とH区中央の掘立柱建物SB05周辺の2ヶ所に集中する。とりわけSB07は溝の規模や最低2回は掘り直されていることから、F区以南に存在した集落の北端を区画する溝の可能性が高い。

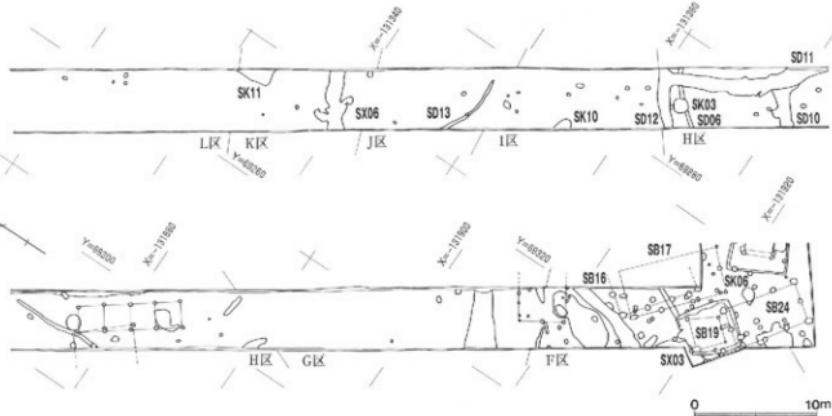


fig. 700 F ~ L区平面図

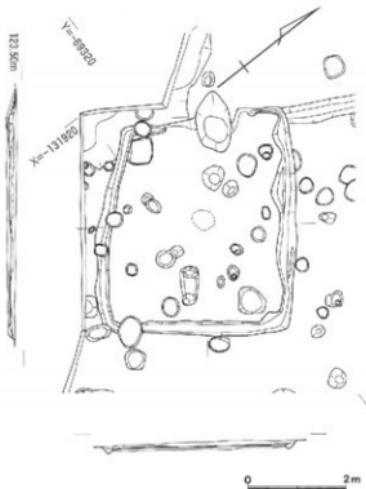


fig. 701 SB19平面図・断面図



fig. 702 F区周辺全景

I - M～O 調査区は摂ねO区～M区では南に傾斜し、Q区～O区は東に傾斜しており、包含層は、N区の南半からM区で残存していたが、他の地区では旧耕作土直下に淡黄灰色粘性砂質土の遺構面となる。

M区～P区において検出した遺構は、竪穴住居7棟、掘立柱建物4棟、溝4条、土坑1ヶ所である。

S B29～S B31は出土遺物から鎌倉時代後期の掘立柱建物である。S B35は、飛鳥時代の竪穴住居が廃絶した後に建てられた掘立柱建物である。



fig. 703 I - N区全景

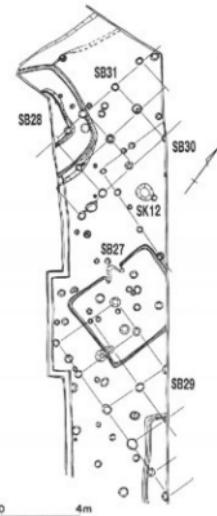


fig. 704 I - N区平面図

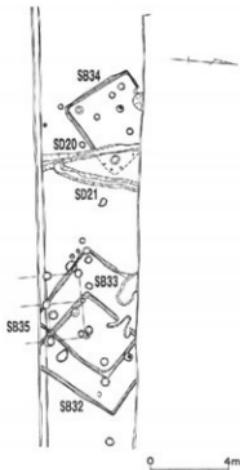


fig. 705 I - O・P平面図区



fig. 706 I - O・P区全景

第II調査区

第II調査区は、平成8年度春調査を実施した部分の北側と南側について実施した。

南側部分は、耕作土・旧耕土・水田造成盛土直下に黄色粘質土（疊含み）の地山となり遺構は確認されなかった。

北側部分では、北端の東西トレンチで鎌倉時代～室町時代の遺物包含層である暗灰色粘性砂質土の堆積がみられ直下の淡黄灰色砂質土上面で溝・ピット12ヶ所・落ち込み2ヶ所が検出された。遺構からの遺物は何れも細片で時期を明確にはできなかった。

南北トレンチでは、段丘崖下で掘立柱建物1棟を検出した。掘立柱建物は、東西2間(3.4m)、南北2間以上(3.2m)の総柱の建物である。

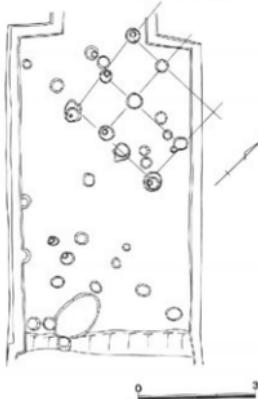


fig. 707 II-C区北部平面図

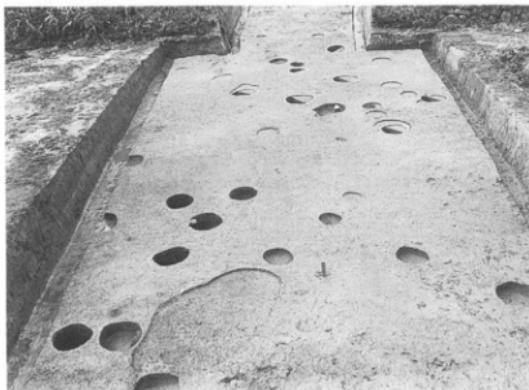


fig. 708 II-C区北部全景

3. まとめ 今回の調査では、弥生時代の集落と飛鳥時代から奈良時代にかけて営まれた集落、鎌倉時代の集落等を検出した。弥生時代後期の堅穴住居は、昭和51年淡河城跡下層の調査で検出されている。この堅穴住居は方形の堅穴に屋内高床部を設けるもので、今回I-O区で検出した堅穴住居より新しい住居と考えられる。いずれにせよ、遺跡内の弥生時代の遺構の密度は散漫で、大規模な集落が営まれたとは言いがたく、小規模な散村的な集落が営まれたと考えられる。

飛鳥時代（7世紀）になると、勝雄宮之浦地区では竈をもつ堅穴住居で後世される集落が出現する。堅穴住居は2時期に建て替えられ、7世紀の半ばには掘立柱建物で集落が構成されるようになる。以後、奈良時代の後半まで掘立柱建物による集落が営まれたと考えられる。

奈良時代以後、集落は一時期断絶するが、鎌倉時代になると河岸段丘の高位に大型の建物が建てられるようになる。SB29・SB31は方位が同一であり、同時期に建てられた一連の建物と考えられ。中世の居館の一部であると考えられる。

以上のように、勝雄遺跡は弥生時代後期～中世まで断続的に集落がいとなまれた複合遺跡と考えられる。



fig. 709 S B13



fig. 710 S B27

遺構名	形狀	規模	時期	
S B02	不整形形	南北4.5m・東西1.3m以上・壁体20cm	飛鳥時代	
S B20	方形	東西3.0m・南北2.1m以上・壁体20cm	飛鳥時代	
S B11	方形	東辺4.8m・壁体10cm	飛鳥時代	
S B10	不整形形	東西4.9m・南北4.6m・壁体20cm	飛鳥時代	西辺中央に竈
S B21	長方形	東西5.3m・南北3.9m・壁体5cm	飛鳥時代	
S B18	不整形形	南辺4.8m・壁体20cm前後残す	飛鳥時代	
S B14	方形	北辺4.8m・壁体25cm前後残す	飛鳥時代	北辺中央に竈
S B13	長方形	東西6.2m・南北4.7m・壁体20cm	飛鳥時代	北辺中央に竈
S B19	不整形形	東西4.5m・南北4.0m・壁体10cm	飛鳥時代	北辺中央に炉
S B26	方形	南北4.5m・東西1.5m以上・壁体20cm	弥生時代終末	
S B25	不整形形	南北5.0m・東西1.1m以上・壁体10cm	飛鳥時代	
S B27	長方形	南北5.2m・東西4.2m・壁体10cm	飛鳥時代	西辺に竈
S B28	隅丸方形	東西6.0m・南北3.2m・壁体25cm	弥生時代後期	
S B32	方形	東西5.0m・南北4.3m・壁体10cm	飛鳥時代	西辺に竈
S B33	方形	東西5.0m・南北4.6m・壁体10cm	飛鳥時代	西辺東よりに竈
S B34	不整形形	東西4.0m・南北3.9m・壁体5cm	飛鳥時代	西辺に竈

豊穴住居一覧表

たまつなか 8. 玉津田中遺跡 平野地区 第13次調査

1. はじめに

玉津田中遺跡は、神戸市西部の明石川中流域左岸の沖積地および段丘面に立地する遺跡である。昭和57年より平成3年にかけて、土地区画整理に伴い大規模な発掘調査が行われ、当遺跡が弥生時代～古墳時代、鎌倉時代を中心とした拠点的集落・墓址遺跡であることが判明した。またその後、圃場整備に伴う調査によって弥生時代～鎌倉時代の集落址、水田遺構を確認している。



2. 調査の概要

A-N 区

調査区の全長は約200mで、便宜上北側よりA～C区を設定した。

全長約40mの調査区で、弥生時代中期～後期の水田遺構（第1水田面）、前期の水田遺構（第2水田面）が確認された。

第1水田面

暗灰色シルト層において検出された遺構面である。

水田遺構は、北半部では畦畔（高さ10～15cm程度）が比較的良好に残り、計3枚の水田が検出された。

一方、南半部では、洪水による砂礫層によって水田面が削平され遺存状態は悪い。しかし、北半部では検出されなかった足跡が、南端でまとまって確認できた。

第2水田面

上記の水田面の下層の洪水堆積層を除去すると、暗灰色シルト層で水田遺構が検出された。水田遺構は、今回の調査のなかで最も良好な遺存状態であった。畦畔は、計9条検出された。

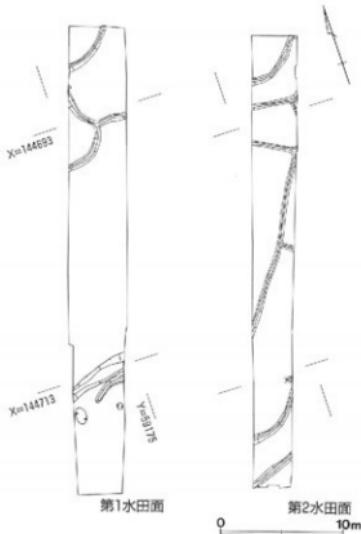


fig. 712 A-N区遺構平面図



fig. 713 A-N区第2水田面

A-S 区 全長約 60m の調査区で、中世の溝、弥生時代中期～後期の水田遺構（第1水田面）、弥生時代前期の水田遺構（第2水田面）が確認された。

中世の遺構面 黄白色粘質土層の上面の北半部で多数の鋤溝とともに、2条の溝が検出された。

S D02 S D01から約 2m 南方に下がったところに、S D01に平行する溝 S D02が検出された。規模は幅約 1~1.3m、深さ約 16~35cm である。堆積土より出土する土器から、鎌倉時代（13~14世紀）に掘削され利用されたものと考えられる。

第1水田面 洪水堆積のよる間層をはさんだ暗灰色シルト層において水田遺構を確認した。

水田遺構は、南半部に3条の畦畔が確認できたのみで、あまり良好な遺存状況ではなく、水田1枚の規模が判るようなものもなかった。

第2水田面 さらに下層において水田遺構が確認され7条の畦畔、1条の溝、2ヶ所の島状遺構が検出された。

畦畔 畦畔は、いずれも不整形である。水田の全体の規模は分からぬが、1辺が明確なもので約 7m と、比較的小規模なものであったと推定される。また南端で検出された溝は、東～西方向に延びる溝で、幅約 1m、深さ約 6~10cm 程度のものであった。

島状遺構 島状遺構は南半部、北半部でそれぞれ1ヶ所ずつ検出されおり、水田面からの高さは、約 20~30cm と、畦畔と比較するとかなり高い。この遺構がどのような目的で造られたのか不明ではあるが、畦畔のほとんどが、島状遺構から延びていていることから、畦畔の結節点としての役割があったと考えられる。ただ、いずれも調査区外に延びているため、正確な規模は確認できなかった。

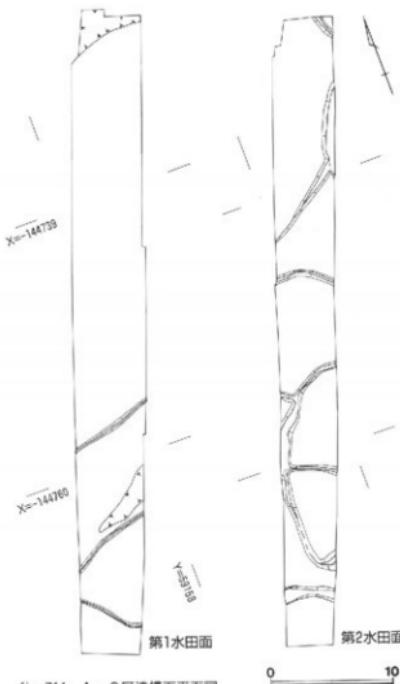


fig. 714 A-S区遺構面平面図

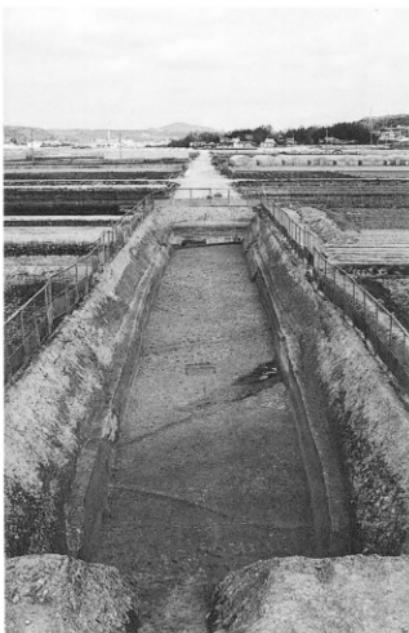


fig. 715 A-S区第1水田面

fig. 716
A-S区第2水田面

B 区 全長約50mの調査区で、調査の結果、弥生時代中期～後期の水田遺構（第1水田面）、
弥生時代前期の水田遺構（第2水田面）が確認された。

第1水田面 第1水田面においては、9条の畦畔がB区内全域で確認された。畦畔は、北半部では比較的良好な遺存状態である。いずれも不整形で水田1枚の規模が分かるものはない。

また、この水田面の北半部では多量の足跡が確認されている。

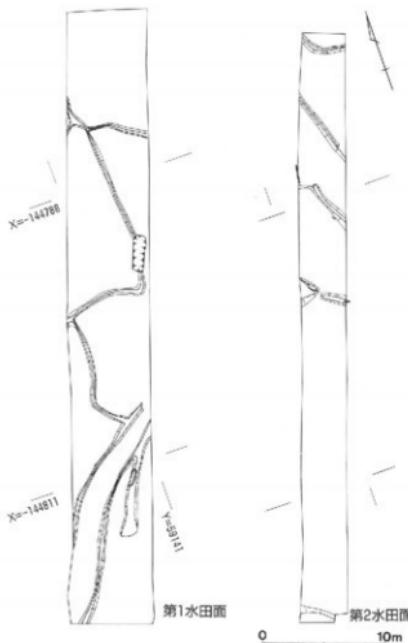


fig. 717 B区遺構平面図



fig. 718 B区第1水田面

第2水田面 第2水田面において検出された水田遺構は、前年度調査の第3遺構面と酷似しており、畦畔が4条検出されたが、そのほとんどは段というべきものである。強度を上げるために、畦畔の内部に直径約5cm程度の木を埋め込むものもある。また、水口状の施設も認められた。

C 区 全長約40mの調査区で、弥生時代前期の水田遺構（第2水田面）が確認された。

中世の遺構 中世の耕作土を除去すると、東西方向に延びる幅約75~90cm、深さ約10~20cmの溝が、並んで2条検出された。また、南側の溝を切るように、北西~南西方向に延びる幅約1~0.5m、深さ約15~25cmの溝状の遺構が検出された。これらの遺構は出土した土器から、鎌倉時代に存在していたと考えられる。

第1水田面は南端に僅かに認められたが、畦畔は検出できなかった。

第2水田面 さらに、約1mほどの分厚い洪水堆積が認められ、水田遺構は畦畔2条、段1ヶ所、杭列2ヶ所が検出された。畦畔はいずれも調査区の端部でわずかに検出されただけで、水田の規模は分からない。

杭列 杭列は北側を杭列1、南側を杭列2とする。杭列1は段と平行にその斜面に打ち込まれている。8本の杭が検出され、その内6本が等間隔（約20cm前後）に打たれている。杭列2は18本の杭と、5基のビットが検出され、鉤の手状の形状を呈している。杭列1とは

異なり、杭は先端を削り出している。ここもほとんどの杭が等間隔（約20cm前後）に並んでいる。土留めの役割を果たすものと推測される。

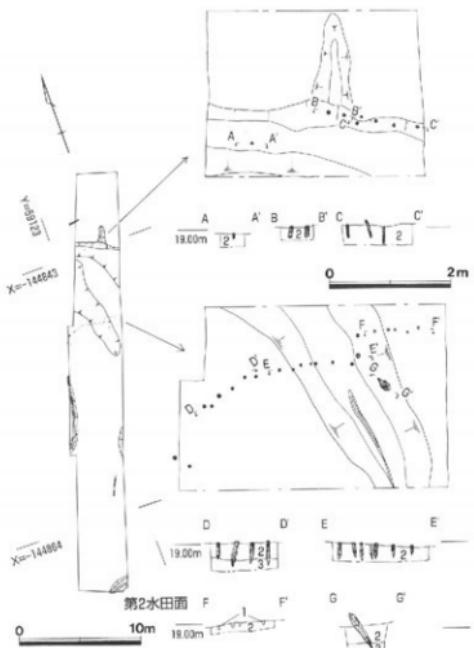


fig. 719 C区遺構平面図
杭列平面図・断面図



fig. 720 C区第2水田面



fig. 721 C区杭列全景



fig. 722 杭列2断面

3. ま と め 今回の調査における各時代の状況は以下のとおりである。

弥生時代以前 今回の調査で、縄文時代晚期の生活面とされている黒灰色シルトからは、若干の土器片が出土している。しかし、A-N区で落ち込みが確認されたのみで、明確な遺物・遺構は検出されなかった。

弥生時代 A-N区～C区にかけて前期の水田が発見された。A-S区では島状遺構、C区では杭列と低湿地の開発に、かなりの労力を投入していたことが窺える。そして大規模な洪水がもたらした土砂で流域の水田が埋没し、一時的にこの地区的稻作農耕を中断させたが、中期～後期には再び水田が造られている。この地域が断続的に生産域として利用されていたと判明した。

A-N区では、洪水堆積によってできた微高地上で、弥生時代後期の土器を含む層が確認され、ごく周辺に当時の集落の存在が窺える。

これまでの調査により、弥生時代の水田が広大な範囲に拡がっているのが判明した。

鎌倉時代 全ての地区で鎌倉時代の遺物を含む褐色粘質土が確認されている。また、その下層の黄白色粘質土から、多数の鋤溝、1条の溝が検出されている。そのことから、耕地として安定的に利用されていたことが判明した。

また、上記の溝は条里地割に従って掘削されており、以前から指摘されているように、条里施工はこの頃に行なわれたと考えられる。そして、この景観は圃場整備施工時まで遺存した。



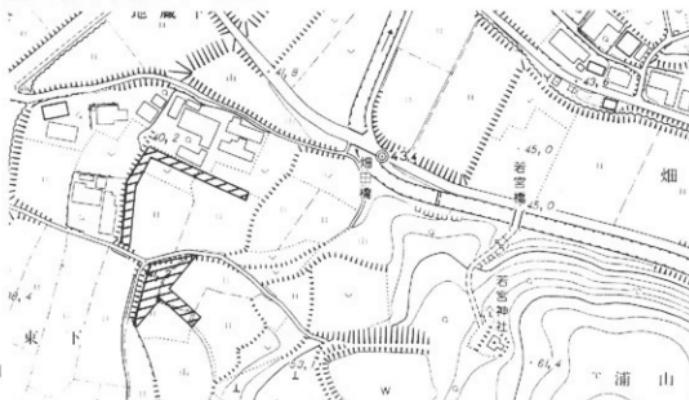
fig. 723
玉津田中遺跡遠景

9. 柏木遺跡 第13次調査

1. はじめに

柏木遺跡は明石川の支流である櫛谷川の中流域両岸の低位段丘上に拡がる遺跡である。昭和60年以降現在までに12次にわたって発掘調査が行われており、弥生時代中期・古墳時代・中近世の集落遺跡であることが確認されている。今回の調査地は谷口川が櫛谷川に合流する付近、櫛谷川左岸の標高約40~43mの河岸段丘先端部に位置する。

fig. 724
調査地位図
1 : 2,500



2. 調査の概要

発掘調査はI~IV区に分割して行った。なお南側のI・II区については削平によって遺構はほとんど確認されなかった。

III・IV区において平安時代・弥生時代の遺構面を3面確認した。

IV区では、耕土・旧耕土下に第1遺構面が存在するが、III区については、近世以降の削平によってこの面は失われていた。さらに下層の弥生時代中~後期の遺物を含む包含層の上面において第2遺構面、その下に弥生中期の遺物包含層を挟んで、無遺物の河道堆積の上面で第3遺構面がそれぞれ検出された。

第1遺構面

検出遺構は平安時代後期の掘立柱建物1棟及び溝2条、ピット群である。

SB01

南北2間(4.1m)×東西1間(1.9m)以上の掘立柱建物であり、北面及び西面にそれぞれ庇を持つ。北面は柱間1.9m、南面が2.0mである。柱穴の出土遺物より、平安時代後期に位置づけられる。

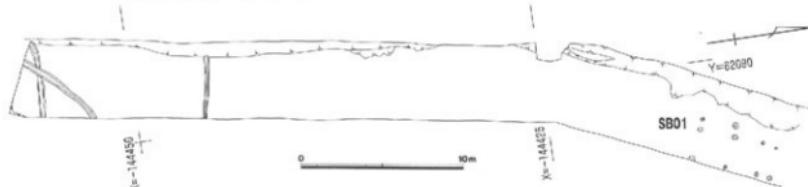


fig. 725 IV区第1遺構面平面図

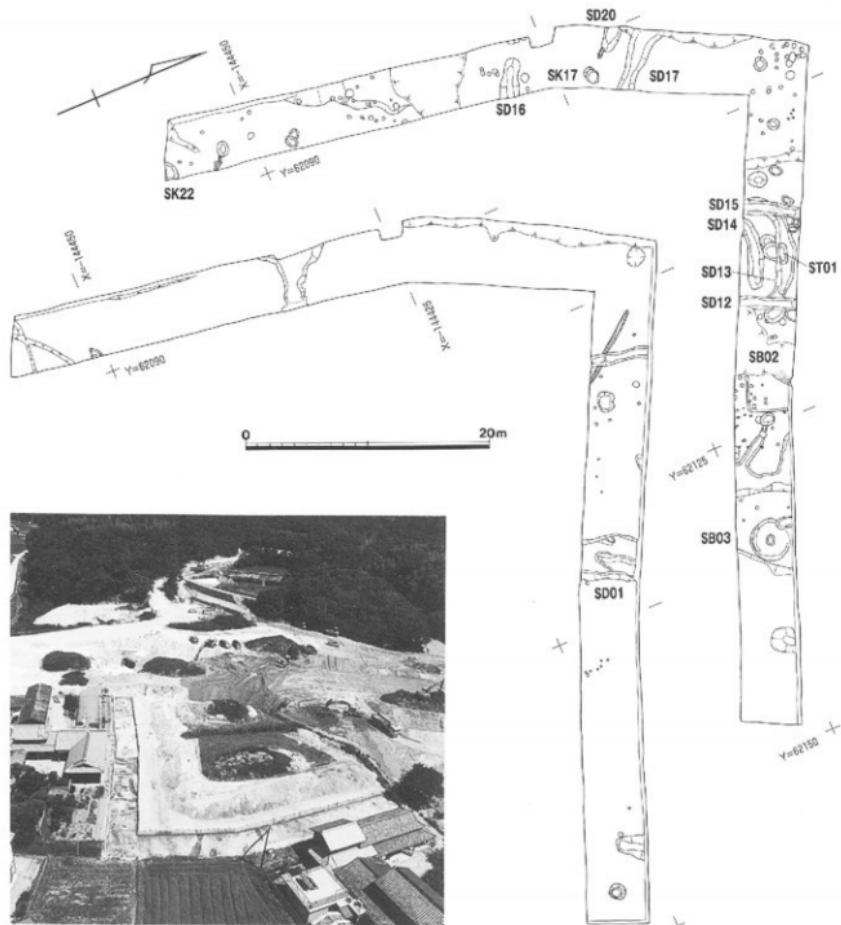


fig. 727 調査区全貌

fig. 726 III・IV区第2・3遺構面平面図

第2遺構面 第2面で検出された遺構は弥生時代中期の土坑5基、溝4条、ピット群、および弥生時代中～後期の流路2条である。

S X02 東西1.6m、南北2.0m以上、深さ90cmの土坑である。埋土は7層に分かれ、どの層にも弥生時代中期の土器が含まれていた。中でも、第2層（黄灰色細砂質シルト）中には多くの土器片が、また第6層（暗灰黄色疊混じり極細砂）中からはほぼ完形の土器が出土した。出土土器より、弥生時代中期に位置づけられる。

S D01 幅約3.7m、深さ約70cmの自然流路である。上、中層埋土である褐灰色細砂、茶灰色疊砂、淡褐灰色疊砂からは弥生時代中期の土器が出土し、下層の明黄灰色細～中砂からは弥

生時代後期の土器が出土した。上層から古手の土器が出土したのは、この流路が、弥生時代中期の包含層を切って流れている事によると考えられる。

S D07 幅約2.0m、深さ65cmの自然流路であり調査区西側で5.5mと急に広がっている。この流路の出土遺物は弥生時代中期のもののみであり後期の土器は含まれていなかったが、埋土の状況がS D01と似通っているため、同一の流路である可能性が高く、弥生時代後期に埋没したものと考えられる。

第3遺構面 第3面では、弥生時代中期の竪穴住居2棟、円形周溝墓1基、木棺墓1基、土坑18基、溝12条、ピット群を検出した。

S B02 南北3.4m以上、東西3.1m以上の方形の竪穴住居である。検出面から床面までの深さは約14cmを測るが周壁溝は検出されなかった。住居址内で検出されたピットは8基あるが、主柱穴は確定できなかった。出土土器より弥生時代中期後半に位置づけられる。

S B03 直径3.6m、検出面から床面までの深さ約30cmを測る円形の竪穴住居である。柱穴は検出されなかったが、床面の中央には直径約90cm、深さ20cmの中央土坑、南壁沿いには幅約20cm、床面からの深さ約5cmの周壁溝が検出された。出土土器より弥生時代中期後半に位置づけられる。

溝 溝は12条検出されているが、その内S D12~17・20はそれぞれ規模が似通っており、機能的にも関連性を持つものと思われる。中でもS D13は周溝墓と考えられるため、その他



fig. 728 S X02

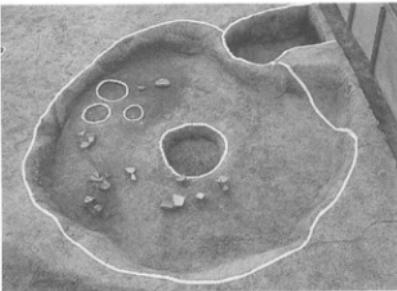


fig. 729 S B03

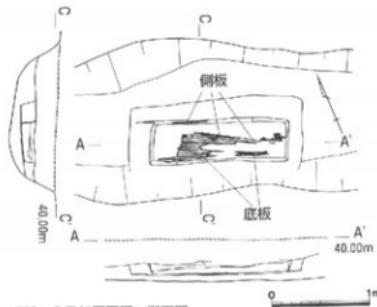


fig. 730 S T01平面図・断面図



fig. 731 S T01

の溝の持つ意味も検討の余地がある。

S D13 周溝墓と考えられる幅約1.7m、深さ50cmの溝である。円形もしくは隅円方形に近い形で巡っていたと考えられ、復元径は約8.0mを測る。主体部は検出されていないが調査区外に存在するものと考えられる。溝の北辺からは埋土中層上面から掘り込まれた木棺墓(S T01)が1基検出された。

S T01 S D13の周溝内埋葬とした木棺墓である。長さ1.6m、幅85cmの掘形を持ち、棺の大きさは長さ1.4m、幅45cm、検出面からの深さ17cmを測る。棺内からは弥生時代中期後半の土器の細片以外は出土しておらず、掘形の埋土からも弥生土器片・サヌカイトチップ・使用目的不明の板の残欠が出土したのみである。棺材は底板が比較的の残存状態が良好で長さ約105cm、幅約27cm、厚さ約1cmを測る。また側板も検出したが残存状態は不良である。出土土器より弥生時代中期後半に位置づけられる。

S K17 直径約1.5m、深さ約37cmを測る、ほぼ円形の土坑である。埋土中からは弥生時代中期の土器が多く出土している。S D17・20に隣接しており、何らかの関連が示唆される。出土土器より、弥生時代中期後半に位置づけられる。

S K22 IV区の南端で検出された。直径1.3m以上、深さ約40cmを測る。弥生時代中期の土器が多く出土している。

遺物 今回の調査では、弥生時代、平安時代の遺物が出土している。弥生時代の遺物は土器、サヌカイト製の石鏡、サヌカイトのフレイク、チップ等である。平安時代の遺物は土器類、須恵器等であるが、量的には弥生土器が圧倒的であった。

3. まとめ 今回の調査では、広大に拡がる朽木遺跡の一部ではあったが、多くの遺構、遺物が出土し、今後、朽木遺跡の拡がりや性格を検討する上で重要な成果であった。以下に調査の成果について記す。

- (1) 平安時代の掘立柱建物が検出され、当該期の集落の存在が認められた。
- (2) 弥生時代後期の流路が検出され、同時期の遺物が出土した事によって、現在未発見である弥生時代後期の集落が存在する可能性が示唆された。
- (3) 弥生時代中期の竪穴住居が検出され、朽木遺跡に隣接し、時期的にやや先行する高地性集落である、城ヶ谷遺跡との関連性を検討する上で、重要な成果を提供した。
- (4) 集落に隣接する形で墓域の存在が認められ、当該期における集落構成のありかたを考える上で重要な資料を提供した。



fig. 732 第3遺構面全景

出合遺跡 第37次調査

1. はじめに

出合遺跡は丘陵上から明石平野へと続く標高約12m～15mの地域に位置している。

弥生時代中期の集落も存在するが、古墳時代中期～後期に規模の大きな集落が造られる遺跡である。また古墳時代の集落と隣接する丘陵上には、帆立貝式古墳である亀塚古墳を含む古墳群も存在した。

今回の調査地は明石川の西岸約140mに位置しており遺跡の東端付近にあたる。

fig. 733
調査地位置図
1 : 2,500



2. 調査の概要

調査地は便宜上、1～3区、1～3トレンチに区分する。

基本層序は耕土、床土、灰褐色砂質土、古墳時代中期～後期の遺物が含まれる暗褐色砂質土、遺構面となる暗黄褐色砂質土（遺構面）である。

遺構面は、標高約11m～12mを測り古墳時代中期の土坑、溝等を確認している。

1 区

調査地の中央やや南側に位置する調査区である。

S D09

幅約2.0m、深さ約0.5mで、ほぼ南北方向に延びる水路状の溝である。堆積層から5世紀代の土師器が比較的多く出土している。

S K01

約120cm×180cm、深さ約15cmを測る楕円形の土坑だが、S D012の埋没後に存在した落ち込みである可能性も存在する。埋土内から5世紀代の土師器の甕が出土している。

2 区

調査地の南側に設定した調査区であり、古墳時代遺物包含層と遺構面を確認している。

遺構は、調査区北隅で幅約40cm、深さ約18



fig. 734 調査区設定図

cmを測る小溝を確認している。

- 3 区 調査地の南西隅に設定した調査区である。包含層および遺構は確認されなかった。
- 1 トレンチ 調査地の東端に位置するトレンチである。トレンチの北側は明石川の氾濫原であり、近世以降の流路により削平されている。多くの溝とピットを確認した。遺構の時期は遺物包含層と遺構内から出土した遺物からすべて古墳時代中期と理解できる。
- SD05 トレンチのほぼ中央で確認した、南西～北東方向に延びる溝である。北肩はSD04に削平されており、幅約3.4m、深さ約0.5mを測る。SD09の延長上で検出しており、同一の溝である可能性が高い。
- 2 トレンチ 調査地の北端に位置するトレンチで、東は1トレンチと接している。トレンチの東側は、明石川の氾濫原であり、1トレンチから続く近世以降の流路により削平されている。
- トレンチの西側は遺構面が残っており、古墳時代中期の溝状遺構を確認した。
- SD10 トレンチ西半で検出した、南北方向に延びる溝である。幅約2.1m、深さ約1.6mを測り、5世紀代の土師器等が出土している。1区のSD09に続く溝だと考えられる。
- 3 トレンチ SD09の延びる方向を確認するために設定したトレンチである。これによりほぼ直線に延びることを確認した。検出したSD09の幅は約2.0mである。
3. まとめ 古墳時代遺物包含層の上面で、数条の小溝を確認している。小溝の最上層～上面を覆う灰色砂質土には近世陶磁器が含まれ、小溝もほぼ同時期と思われる。
- 古墳時代遺構面で検出した遺構の時期は、出土した土師器から基本的に5世紀代であろう。また、この遺構面から検出した遺構の多くは溝状遺構であり、このなかには自然に形成された小流路も含ものの5世紀代だと理解できる水路状の溝があり調査地の中央で、ほぼ南北方向に延びる状況を確認している。集落や耕地開墾等に伴う遺構であろう。
- 先にふれたとおり調査地は出合遺跡の東端に位置する。水路状の溝と併に比較的多くの遺物も出土したが、直接的に古墳時代の集落と関連する遺構は確認できなかった。集落の辺縁部に位置するとと思われる。

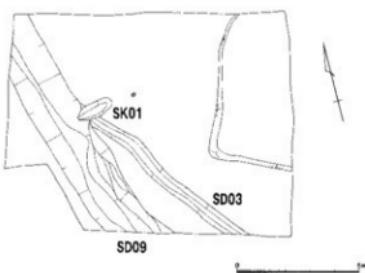


fig. 735 1区遺構平面図

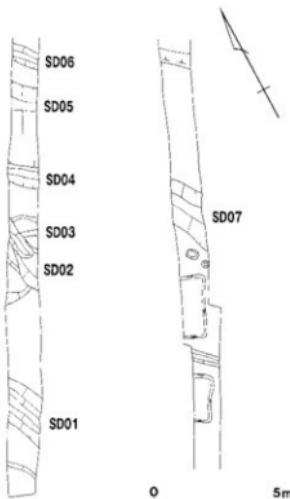


fig. 736 1トレンチ平面図

ながさか 11. 長坂遺跡

1. はじめに

長坂遺跡は、明石川の支流である伊川の中流左岸に位置し、伊川によって形成された沖積地に立地し、標高約35mから約45mを測る。

昭和59年から62年度にかけて圃場整備事業に伴う確認調査で発見された遺跡で、昭和62年度には、縄文時代の遺物包含層及び、古墳時代、中世の集落址が検出された。

また、平成4年から7年にかけて兵庫県教育委員会が神戸西バイパス建設に伴い調査を実施し、縄文時代の土坑、縄文時代中期の土器、石器類、古墳時代の堅穴住居址、室町時代の鋳造関連遺構、炭窯などが検出された。



fig. 737
調査地位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査地の基本層序は、第1層現代の盛土、第2層黄色細砂、第3層淡灰色細砂、第4層暗茶褐色砂質土、第5層茶褐色砂質土、第6層暗灰色細砂、第7層灰褐色砂質土、第8層暗灰褐色細砂～中砂、第9層黄灰色細砂である。このうち第7層が遺物包含層であるが、遺構面は第7層上面、第8層上面と第9層上面のあわせて3面存在した。

第1遺構面

調査区北東部の灰褐色砂質土上面で土坑を2基検出した。

S K101

幅160cm、長さ180cm以上、深さ40cmの隅丸方形の土坑である。埋土の底から少し上に炭の層が10cm程の厚さで堆積していた。土坑の壁面は火を受けた形跡ではなく、埋没時に投棄されたものと考えられる。なお、遺物は出土しなかった。中世の遺物包含層の上面で検出したことから、第1遺構面の時期は中世より新しく、近世まで下る可能性がある。

第2遺構面

調査区北東側と中央部の暗灰褐色細砂～中砂上面でビットを16基、土坑1基、溝2条を検出した。なお、調査区南側ではこの遺構面で自然流路の肩を検出した。およそ中世後期であると推定される。

S K201

径約220cmの円形の土坑で、深さは25cmである。埋土から須恵器・土師器の小破片が少量出土している。

S D201

幅約160cm、長さ310cm以上、深さ35cmの溝である。埋土から須恵器・土師器の小破片

が少量出土している。

ピット いずれも直径 20~30cm、深さ 20~30cm であるが、建物としてはまとまらない。

自然流路 幅、深さとも不明であるが、東から西へ流れている。埋土の砂礫層から奈良時代と中世の土器が出土している。

第3遺構面 調査区中央部より北側全体の黄灰色砂質土上面でピット 23基、土坑 5基、耕作痕の溝 17 条を検出した。遺構埋土より14世紀の土器片が出土していることから、14世紀代の遺構面であると推定される。

SK305 径約 240cm の楕円形の土坑で、深さは 50cm である。遺物は出土しなかった。

ピット いずれも直径 20~30cm、深さ 20~30cm であるが、建物としてはまとまらない。

耕作痕 幅 20~50cm、深さ 5~10cm の溝で、東西方向のものがほとんどであるが、南北方向のものも 2 条存在する。いずれも耕作に伴うもので、現在の田畠の畝の方向とは異なっている。

3. まとめ 今回の調査区は平成 6・7 年に兵庫県教育委員会が実施した調査区の南に隣接しており、第3遺構面が県教育委員会の調査の遺構面に対応するものと考えられ、中世の遺構面の広がりをさらに確認することができた。調査区南側では大きな自然流路が検出され、その南は遺跡が存在しないことが試掘調査で明らかになったので、今回の調査区が中世集落の南限部に当たることが確認された。

なお、遺物包含層及び自然流路中より奈良時代の土器が比較的多く出土しているが、付近に奈良時代の遺構が存在することが想定され、今後の調査で検出される可能性がある。

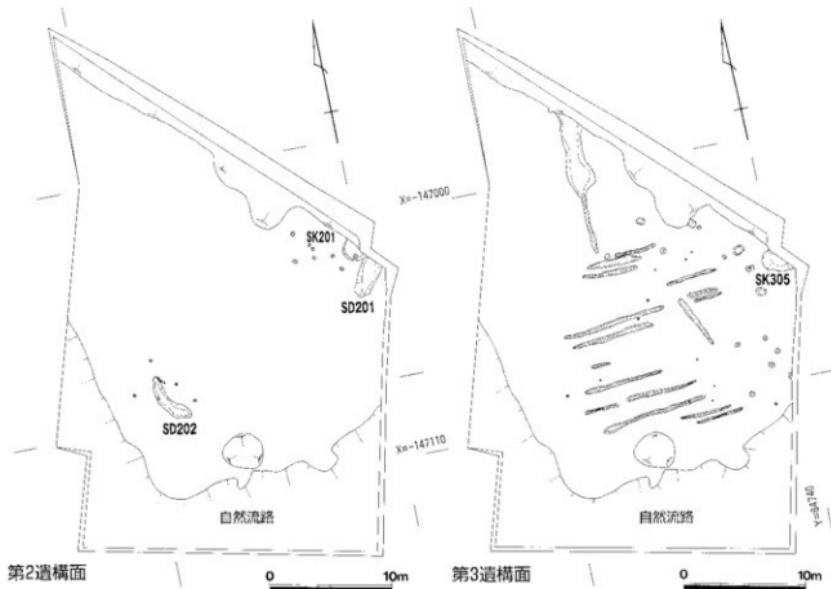


fig. 738 調査区平面図

IV. 平成9年度の大規模試掘調査

概要

神戸市では、各種開発や造成工事に伴い、これに先立って埋蔵文化財の存否を確認する試掘調査を実施している。住宅建設等に伴う小規模な試掘調査以外に、広域にわたり大きな地形改変を伴う土地区画整理事業、土地改良事業などに伴う大規模試掘調査があり、毎年広範な地域において実施されている。これらの試掘調査によって新たに遺跡の存在が発見されたり、周知の遺跡内でも、対象地域の遺構等の状況がより明確になり、遺跡の詳細な内容が把握できるようになってきている。

調査は、基本的に一辺2mの方形の試掘坑を設定し、バック・ホールまたは人力により遺物包含層上面ないしは遺構面直上まで掘削し、その後、平・断面の精査を行っている。また、必要に応じてトレンチ調査で確認している場合もある。

平成9年度に実施した大規模土地改変に伴う試掘調査は、土地改良事業に伴うものとして北区淡河町野瀬地区、八多町八多地区、有野町北神星和台、西区平野町向井・慶明地区の各土地改良事業がある。また、玉津健康福祉ゾーン建設に伴う青谷遺跡の試掘調査も実施した。

北区淡河町野瀬地区では、昨年度に引き続き広範囲の調査を実施した結果さらに中世の遺物包含層の広がりが確認され、一部では遺構も検出されている。八多町八多地区においては、中世および古墳時代の遺構を確認することができた。

西区平野町向井・慶明地区においては、昨年度実施された分布調査で確認された遺物散布地を中心実施された。うち、向井地区においては、丘陵上において緩やかに弧を描くと思われる溝が検出され、埋土などの状況から、削平された古墳の周溝である可能性が高い。また慶明地区においては、中世の遺構および遺物包含層が確認された。一部では、古墳時代後期の須恵器片も出土しており、同時代の集落址の存在も予想される。

青谷遺跡においては、工事予定地内の山林に3本のトレンチを設定した調査を実施したが、明確な遺構・遺物は確認されなかった。

大規模試掘調査一覧

事業名	遺跡名	調査主体	試掘坑数	試掘面積	試掘調査結果
野瀬地区圃場整備事業	野瀬	神戸市教育委員会	56	854m ²	中世の遺物包含層 遺構(ピット等)を確認
道場・八多特定地区 区画整理事業	日下部 八多中	神戸市教育委員会	29	157m ²	古墳時代・室町時代の遺物包含層 遺構を確認
北神星和台 第二土地区画整理事業		神戸市教育委員会	トレンチ	210m ²	遺構・遺物確認されず
明石川沿岸地区区画整理事業 (平野町向井・慶明・芝崎)	福中城址 芝崎 居住・小山	神戸市教育委員会	215	854m ²	中世・古墳時代後期の遺物包含層 一部に古墳の周溝を確認
玉津健康福祉ゾーン建設	青谷	神戸市教育委員会	トレンチ	54m ²	遺構・遺物確認されず

凡例



試掘調査
対象範囲



試掘調査
地点



遺跡存在
範囲



fig. 739 北神地区試験調査地域全体図



fig. 740 北神星和台試験調査地点

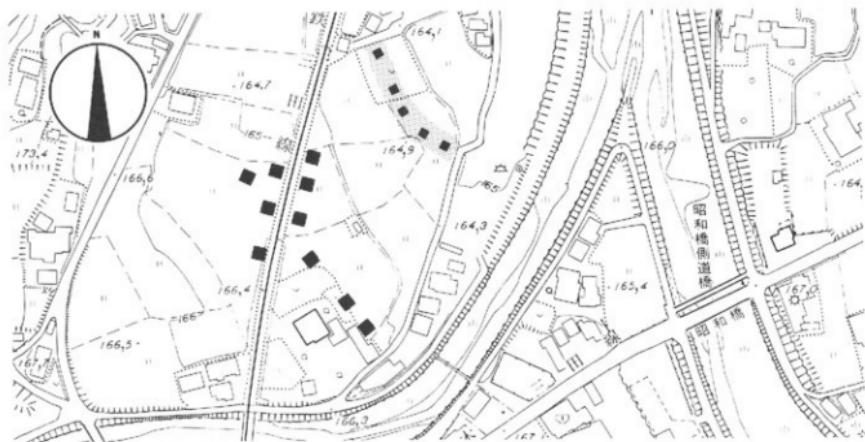


fig. 741 八多地区試掘調査地点(1)

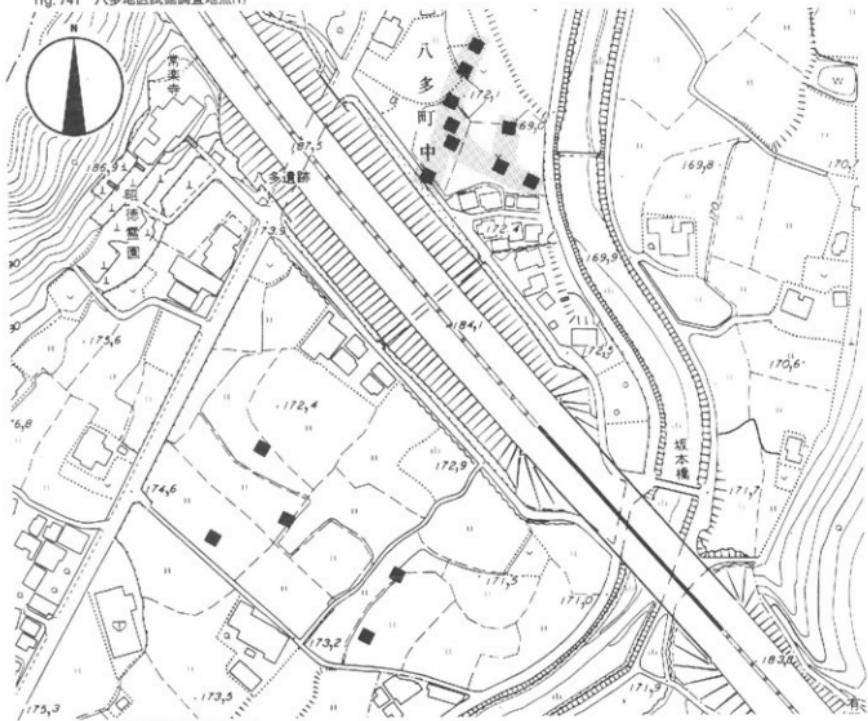


fig. 742 八多地区試掘調査地点(2)



fig. 743 北区淡河町試験調査地域全体図



fig. 744 野瀬地区試験調査地点(1)

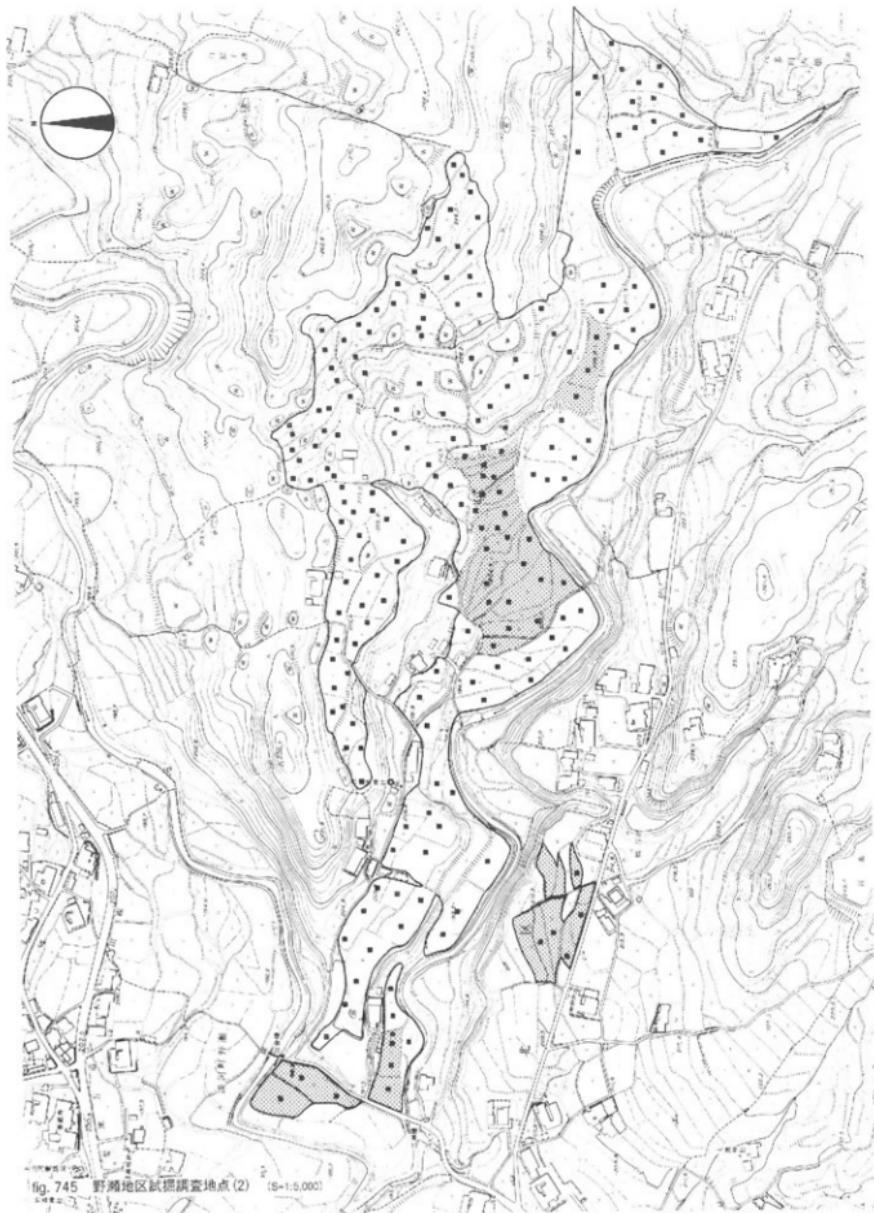


fig. 745 野瀬地区試掘調査地点(2) (S=1:5,000)

fig. 745 野瀬地区試掘調査地点(2)